

特 集

大学生



敬愛大学国際学部
特任教授

武内 清

東京学芸大学教育学部
准教授

浅野 智彦

対
談

大学生の現在

大学生と「まじめ化」の進展

武内 バブルが崩壊した1990年代前半から、大学生の生活の重点は、「遊び」から「授業」にシフトした気がします。大学生の出席率や資格志向が高まり、一方大学も「専門学校化」しているところがあります。

浅野 「まじめ化」「実利志向」は、大学生を見ていて感じますし、さまざまなデータからも明らかです。

武内 大学生のまじめ化に対する評価は、大きく2つに分かれます。ひとつは、例えば「学問の基礎を学び、将来のプラスになる」といった肯定的なもの。そして、もう一つは、「高校生と変わらず、自主性がない」といった否定的な評価です。

浅野 岩田弘三さんは、「勉強文化は一度停滞し、再び復活した。しかし停滞していた時期に教養主義的なものがそぎ落とされ、復活したら『脱・教養主義的』な勉強文化になっていた。同じ勉強文化でも全然違う」と、おっしゃっています（武内・岩田編 2011）。

ただ、ブルデュー的に言えば、実用からどれだけ距離をとるかがブルジョア文化の指標みたいところがありますね。資格志向は労働者文化に近く、源氏物語を読むことなどは、むしろブルジョア文化に近いでしょう。

大学生の勉強文化全体が、実利志向にシフトしているのでしょうか。それとも入学難易度のような軸に沿って、教養主義と実利主義の分化が進んでいるのでしょうか。

武内 私が調べた限りでは、分化している印象です。伝統総合大学は資格志向ではなく、「教養的なものを学びたい」「直接役に立たなくてもよい」「興味があるものを学びたい」との意見です。伝統総合大学にはこうしたコメントを寄せる学生が多くいるので、教養主義はまだ残っている気がします。

一方、中堅大学や新興大学では、大学自体がキャリア教育的なものを授業にかなり取り入れています。以前はキャリア教育は授業科目の外にあり

ましたが、最近では科目内に入るようになっています。つまり大学のカリキュラム自体が、実利化しています。

浅野 大学生の変化と文教政策の方向とが合致し、まじめ化が実現している部分があります。教員免許を取得したい学生は、板書のやり方、授業案の組み立て方など、すぐに役立つプラティカルな授業を望む声が多く、そのため社会学は「無駄」と言われがち。ちょっと寂しいですね。

武内 A. H. ハルゼーの『イギリス社会学の勃興と凋落』（Halsey 2004=2011）に、サッチャー政権時のイギリスで社会学科がどんどん減らされた歴史が書かれています。日本で社会学科が減らされたことはほとんどありませんが、イギリスでは「役に立たない学問」と言われ、社会学科自体が減らされました。

浅野 イギリスの社会学は、非常に実利的な印象のものもありますが、それでも減っているんですね。

一口に「まじめ」と言っても、資格を取るための勉強に向かうものもあれば、知的好奇心の趣くままに勉強するというまじめさもあります。

それに加えて、ボランティアや社会参加に取り組むまじめさもあります。このボランティア的まじめさは、どのような傾向がみられるのでしょうか。

武内 千石保さんの『新エゴイズムの若者たち』（千石 2001）には、こんな分析がありました。今の若者はエゴイズムが強く、自分をとても大事にするけれど、同時にボランティア活動もする。「人のために」との押しつけがましさはなく、自分が楽しみながら取り組む。そんな気持ちを、阪神・淡路大震災以降みんなが持つようになったと。

我々の調査でも、ボランティアについては同様の結果がみられました。「他人への奉仕」と「自分の楽しみ」が、併存している印象です。

若者たちはこれまで、「島宇宙」の中の人、つまり身近な人や仲のいい人の気持ちには共感するけれど、それ以外の人には無関心と言われてきました。しかし、今回の東日本大震災で、「島宇宙」

の外の人（被災者）に対する共感もいただくようになってきているのではないのでしょうか。

大学生にとっての「人間関係」

浅野 全国大学生生活協同組合連合会（全国大学生協連）の調査では、大学に「豊かな人間関係」を求める人は、ある時期までは増え続けましたが、その後長期的に減っています（武内・岩田編2011）。豊かな人間関係を求めるかわりに、勉学志向が強まっていると分析しています。

内閣府の世界青年意識調査では、充実感があるときとして一番多かったのは「友人といるとき」で、次に来るのは「家族といるとき」という結果です。友人といるときに充実感を感じる人は、1980年代から2000年代中頃まで、直線的に伸びてきました。一方、減ってはいないけれど、「友人といるとき」に比べ、相対的に見て低い数字なのが「仕事や勉強に打ち込んでいるとき」です。勉強に重要性を見出すのは、充実感があるからではなく、将来のことを考えると、そうせざるを得ないのかもしれない。

また、「世界青年意識調査」で学校の意義をたずねると、日本だけが突出して、「友人関係を育むこと」に大きな意義を見出しています。ところが、調査を通じた私の感触では、大学生は「親密な人間関係はほどほどでいい」というぐらいだと思います。

いまなお大学生にとって身近な人間関係に重心があるのだとすると、島宇宙化批判は比較的当たっているでしょう。逆に、身近な人間関係に執着する段階が終わったのであれば、島宇宙化はピークを越えたことになると思います。

武内 大学卒業生に、「大学時代の経験で一番役立っているものは何か」とたずねると、やはり「友人関係」がトップで、「勉強」は2番目ぐらいです。友人関係の大切さは、いつの時代も変わりません。それが島宇宙的に閉鎖的になるかどうか問題ではないのでしょうか。

先日、『合コンの社会学』（北村ほか 2007）を

読んで感心したことがあります。この本を読むまでは、若者の合コンへの関心事はいかに自分が異性にもてるかだと思っていました。しかし実は、合コンに行く若者は、仲間にすごく気を遣っています。例えば、場が盛り上がりなければ自分が「壊れキャラ」になり、自分は嫌われてもいいから、そのキャラを演じ、場を盛り上げようとします。そんな若者を見ると、周りの友人関係や場の空気を、何よりも大事にしていることを感じます。

浅野 人間関係に関しては、私が大学生だったころより、はるかに繊細なセンスを持っている気がします。昔は、空気を読まない人も、それ相応の役割やポジションがあったと思いますが、今はそういった状況ではないようですね。

偏差値の影響の現在

浅野 昨秋、仲間と全国の30近くの大学に通う2千数百人の大学生への調査を行いました。おもしろい結果だと思ったのは、自分の有能感についての質問です。「外見に自信がある」「特技・才能がある」「勉強が得意だ」「友人関係に恵まれている」の4つのうち、回答が一番多かったのは最後の項目です。約7割の大学生が、「友人関係に恵まれている」を選びました。

一方、「外見に自信がある」と答えたのは、約1割にとどまりました。今の大学生は、「自分はイケてないけれど、友人関係には恵まれている」と考えているようです。しかも、この傾向は偏差値に関係がない。

武内 以前高校生を調査したときも、高校の偏差値と友人関係には関係が見られませんでした。むしろ、偏差値が低い高校のほうが、友人関係の満足度が少し高かったですね。

浅野 人間関係充実度は、大学生全体に共通する特性ですね。

武内 大学の入学が第1志望だったかどうかと、その満足度が入学後にどう変わったのかを分析したことがあります。偏差値が低く、最初はあまり

入学を志望していなかった大学でも、入ってからの友人関係や、先生たちの指導、資格や就職のサポートなどで満足度が高まるケースが多かったのです。今は、新興大学や偏差値が高くない大学のほうが、教職員は学生を熱心に手取り足取り面倒を見る傾向があります。

浅野 居神浩さんの「ノンエリート大学生に伝えるべきこと」(居神 2010)は、いわゆる「フランク大学」の教員が今何をすべきかについて書いた論文です。さまざまなサポートを学生にすることが教員に求められると指摘しているのですが、提唱される内容に「なるほど！そこまでやらないといけないのか」と驚きました。確かに、あのようには面倒を見たら、大学生の満足度も上がるでしょう。

実利志向と、その弊害への懸念

浅野 友人関係の充実は、1980年代ごろまでの日本の典型的な大学像ですね。これに対して、資格志向の大学像や、就職後に役立つことを教えるのは、比較的最近のことだと思います。

本田由紀さん(東京大学)が大学教育は職業的レリバンスをもっと高めるべきと議論をなさっています。私も基本的には、そうだと思います。しかし一方で、そこを強調すると、しばしば本田さんの本来の意図とは違う形で大学の实利志向と共振し合ってしまう、大学として大切なものが失われる気もします。そのあたり、武内先生はどう思われますか。

武内 職業に直接結びつかないようなこと、つまり一生懸命勉強する、何かを調べて発表する、みんなディスカッションするなど、大学での経験には、社会に出てから役立つことがたくさん含まれていると思っています。

浅野 学生たちのグループワークでも、分業して効率的にやるのと、全員でごちゃごちゃやるのでは、後者のほうが一見無駄が多そうです。しかしその無駄が大切だったりするんですよね。無用の用、と言いますか。

武内 そうですね。卒業生からは「就職してからグループワークが役に立った」と言われることもあります。日本にはグループで仕事を進める企業が少なくないので、大学でのグループワークは、将来役に立つと思いますね。

浅野 そういった、短期的には無駄に見えるが超長期的には意外と役立つ要素が、大学の中で生き延びていくためには、どうすればいいのか。やはり効率主義が強まってしまうと、そうした要素が切り捨てられやすいように思います。職業的レリバンスを強調するのは決して悪くはありませんが、あまり強調しすぎると、短期的に役立つものしか生き残らないのでは、と危惧します。

家族志向・地元志向の逆説

浅野 身近な人間関係といえば、友人関係だけでなく、家族志向もすごく強まっています。

武内 そうですね。教え子に、家族が東北で被災した男子学生がいます。このまま学生を続けるのは経済的にも苦しく、家族のために地元に戻って働きたいと言っていました。しかし、家族からは「今は帰ってきてても仕方がない、頑張って卒業しなさい」と言われ、悩んでいました。

浅野 今の若者は、基本的に家族の仲がよく、親を尊敬している人が多いですね。

随分前に山田昌弘さん(中央大学)が、パラサイト・シングルについて指摘していたように、親と子の間の斥力が失われているのかもしれない。それと同時に、若者たちが地元志向を強めているという指摘もあります。「身近な友人関係と家族がある、だから地元で十分だ」という考えがみられると思います。

武内 昔はUターン、Jターンなどと言われることもありましたが、今は地元に戻って仕事があるかどうか。地方の産業の疲弊化が進む中で、戻りたくても仕事がない状況になっているところも多いのではないのでしょうか。仕事は都会に多く、地方に少ないでしょうから、そこが一番深刻ですね。地元の仕事があるなら帰りたいとの気持ちを持つ



「生きる力」の強調と コンプライアンス化の進展

武内 我々の時代は、大学で教師から習うより、自分でいろいろな思想家や作家の本を読んで学ぶ意識が高かったですね。教養志向の話と関係あるかもしれませんが、今の学生の勉強は大学の先生から教わるものになっています。今の大学生はある意味、大学教師に対して大変従順になっています。

一方、現在は、どの学問分野も基礎的な部分を学ばないことには先に進めない傾向があります。

それにしても、勉強（学問）イコール大学の授業、みたいな風潮があります。大学の授業以外で学ぶ機会が減ってきていると感じます。

浅野 同感です。それはなぜでしょうか。小中高の教育のシステムが、そのように改変されてきたのでしょうか。

武内 大学進学率の上昇に伴う、大学の「学校化」、大学生の「生徒化」にもその一因があると思います。

浅野 ところで、いわゆる「ゆとり教育」が開始されてから、小中高校生に対して強調されてきたのは「生きる力」です。生きる力とは、自分で問題を発見し、自分で解決策を講じる力だとよく言われています。しかしその一方で、「大学の先生から教わること（だけ）が勉強」と考える学生が増えているのはなぜでしょう。ゆとり教育は、それとは正反対だったはずですが。

視点を変えれば、大学生だけでなく、社会全体がコンプライアンス化しているのかもしれませんが。ある大学では、学生は飲み会をするとき、大学に誓約書を出すよう求められるそうです。大学は、学生に対して、今まで黙認してきた部分、自由空間として大目に見てきた部分を減らし、何か事が起こったとき法的にエクスキューズできるよう、しっかり管理したいのでしょう。

私が勤務する東京学芸大学でも、24時間学生に開放されていたサークル活動用の建物が今春より夜間閉鎖となりました。大学生が自分の自由をモラトリアム的に実験できていた部分が、どんどん

ている学生は多くいると思います。

浅野 雇用問題が全体的に厳しくなり、地方ではより一層厳しくなっています。地元では雇用がないので就職できず、収入がないので結婚できない。家族を愛しているけれど、地方にいる限り家族形成が難しくなる。そんな逆説的な構造があるような気がします。

友人関係を大切にする志向については、周りの大学生を見ていると、いろいろなデータからも強まっているのがわかります。家族を大切にする志向も同様に強いと思いますが、それが客観的な情勢としてはかえって、自分たちの首を絞めるかもしれません。

以前、東北のある中小都市で、若者にインタビューをしたことがあります。彼らは東京、あるいは仙台まで出れば、それなりに仕事があると思うのですが、地元を出たくないようでした。遊び相手がいなくなるからこの町に留まりたい、と話していました。しかし長期的には、生活がだんだん苦しくなり、結婚も難しくなっていく。所得の低い男性はなかなか結婚しない傾向にあり、結果的に家族を形成できなくなっています。

縮小している。

生きる力を重視する教育の結果として、なぜこうなったのか不思議です。とはいえ、社会全体がコンプライアンス化を強めているから、大学もその流れには逆らえないというところはあるかと思えます。他方で、大学生もそのような作法を自らのものとして学習してしまうという面がある。つまり、コンプライアンス化しているのは大学だけではなく、学生もであるということです。例えば、先生が触れない本を下手に読むよりは、言われたことに従っておいたほうが良いと考えるのはそういう傾向の表れかもしれません。失敗したとき「先生の言うとおりにやりましたけど」と言えますから。その意味では、リスク回避が上手くなっているのかもしれません。こうした大学生のリスク回避志向と、大学教員にやたら従順になる生徒化の現象は、裏表の関係であって、軌を一にしている感じがします。

それに対して大学や教員は何ができるのか。もちろん、だからといって今さら管理を緩めて、事故が起きては大変ですが。

武内 管理者の立場からすると、そうせざるを得ないのでしょうか。しかし学生の自由空間をどんどん削るのは長い目で見たらいいことなのか疑問に感じます。社会に出てからの失敗は許されませんが、大学生活の4年間は失敗しても実生活に響きませんから、何でも思いっきりできるメリットがある。それが失われていくのは残念です。

浅野 先ほどから話題になっていますが、自立志向やコンプライアンス化の中で失われがちな、長期的に見ると役立つ面や意義が見出されるような側面を、大学の中でどう確保・維持していくかが問題ではないでしょうか。長い時間をかけなければよし悪しがわからないものに、マーケットは向いていないと思いますが、大学はマーケット型になってきている。今は短期的に効用がわかるものばかりが目立っている印象を受けています。



海外志向の低下——日常性と非日常性

浅野 最近は留学志向が弱まり、旅行も含め、若者の海外に出たい気持ちが低下していると言われています。

友人志向、家族志向、地元志向など、身近な人間関係で十分楽しいと感じる感覚が広がり、そのことと留学志向の低下はつながっているのかもしれない。

武内 海外へのあこがれがなくなっているのでしょうか。海外体験のある人が以前よりも増え、身近に中国や韓国からの留学生が増えています。海外との垣根がなくなり、海外に行くこと自体は、それほど勇気が要ることではなくなりつつあります。雑誌やインターネットで情報を得ることもできるようになる中で、現地でしか学べないことや得られないことがイメージしにくくなっている面もあると思います。また、海外に留学しても、就職に有利になるわけではない、むしろ就職活動が遅れてしまう、と感じている学生が増えているように思います。

浅野 留学や旅行で海外に行くことが、今や珍しいことではなくなっていて、今では海外経験がな

い学生のほうが少数派かもしれません。海外のいわば非日常経験、非現実としての価値が薄れていると思います。

私は大学生のとき、インドに旅に出かけましたが（今なら「自分探し」と揶揄されるでしょうが）、今は「インドに行ったから、それが何？」みたいな感じになっているようです。「自分探しって何？」みたいな。

今の大学生は、何に非日常経験、非現実を求めているのでしょうか。過酷な環境にあえて行くことが、かつては成長のための通過儀礼のような意味を持っていたかと思います。今の大学生は、何にそれを求めるのか疑問です。過酷といえば、就活でしょうか。

武内 そうですね。大人になる通過儀礼は就活かもしれませんね。あるいは、そもそも非日常を求めているのかもしれない。

浅野 今、日常自体が不安定ですからね。日常を確保することに価値があるのかもしれない。

武内 井上俊さんが指摘した「聖・俗・遊」という概念があります。かつては、この3つの分野は独立してそれぞれの機能があり、緊張関係がありましたが、その自立性は今や失われ、馴れ合い過ぎたのかもしれない。だからそういう通過儀礼がなくなっているのでしょうか。日常の家族志向、自分志向などを実際に各自の人生で貫徹すること自体が、簡単ではなくなっています。

浅野 家族をつくること自体が、クリアすることが容易でないハードルの高い課題になりつつありますから。このことは、前述の「家族や友人などの身近な人間関係志向」ともリンクしていそうです。

母娘関係の葛藤と専業主婦志向

武内 一方で、少数かもしれませんが、母娘関係の複雑化もあるようです。お互いかなり葛藤を抱えたりする例がみられます。家族関係もすべて良好というわけではなく、児童虐待とまではいなくても、いろいろなものを抱えているんですね。

浅野 母と娘の関係が難しいものになる理由の1

つは、理想とするライフコースモデルのずれでしょうか。母親の時代は専業主婦が一般的なモデルだったかもしれませんが、娘の時代のライフコースは多様化してきて、必ずしもそうではなくなっています。娘が専業主婦にならないと、母親は自分が否定された感じになるというケースもあるのかもしれない。

逆に、ここ数年よく議論されているのが、若い女性の保守化、つまりいわゆる専業主婦志向の再度の高まりです。それが仮に事実ならば、そのことが母娘関係にどのような影響を及ぼすのかが気になります。この専業主婦志向の強まりは、偏差値に関係なく多くの大学でもみられるのでしょうか。

武内 今の時代、結婚して専業主婦になれるのは、裕福で親が援助してくれる一握りの層だと思います。かつては夫の給料だけで生活できていた時代がありましたが、今は難しいでしょう。だからこそ逆に、専業主婦願望があるのかもしれない。

コンサマトリー化の可能性と困難

浅野 ある程度人間関係が充実していれば、ほかは程々でいい。何が欲しい、何が食べたい、どこに行きたい、といった部分は我慢できる。最近の若者の意識には、そんな傾向もみられるのではないのでしょうか。比喩的に言えば、小さい水平の領域の中で自足している感じです。上に行こう、横に広げようとは思わない。上昇志向・拡張志向が相対的に後景化していると私は考えています。

逆に、上昇と拡張を目指す人たちの中には、今ここにあるものを目的達成の手段とみなしているケースがみられるように感じています。友人関係にしても、「この人と付き合っておけばいつか役立ちそうだ」というように。

そうしたケースでは、今ここにあるものを手段化することで、何か重要な価値を棄損している気がします。だから今の若者が、今ここにある関係に充実感を覚えているのなら、それはそれでむしろあるべき姿に近いといえるのかもしれない。

しかし一方で、それでは地方の若者は就職できません。コンサマトリー（何かの手段としてではなく、それ自体の楽しさゆえにあることをしようとする態度）なものだけで人間は生きていけないのです。食い扶持といえますか、ある程度の道具的・手段的なものを確保する必要があります。その部分が今、うまくいっていないのでしょう。良い傾向かなと思う面と、しかしそれでは長続きしないだろうと心配になる面の両方があります。

武内 中国の大学生を見てみると、みんな本当に意欲的に勉強しています。これでは日本は負けてしまうな、大丈夫かなと思ってしまいます。大企業も、中国の留学生を採用するケースが増えていきます。

日本の豊かな社会が、若者の意欲を減退させているのでしょうか。若者の低いところでの安定志向は、国レベルで考えると困ったことです。

浅野 ダニエル・ベルの「資本主義の内在的矛盾」でしょうか。資本主義が高度化、消費社会化し、コンサマトリーな価値観が主流になると、生産主義的・道具主義的な熱意を持つ人たちが減っていくというような。

グローバルな資本主義の中で、草食化した優しい日本の若者は疎外されてしまうのでしょうか。それとも彼らが資本主義のロジック自体を書き換えうるのでしょうか。もっとエコに、サステイナブルにと。

原発事故と若者の反応

武内 若者がこれまでは生活レベルを落とさたくないと言っている、今回の東日本大震災でそれも言えなくなってきました。原発のリスクがあっても豊かな生活を維持したいのか、それとも原発のリスクを回避して生活レベルを落とすかが、問われ始めています。

浅野 武内先生のところの学生は、原発に対してどんな反応ですか。

武内 学生によっていろいろだと思います。無関心で放射能の被害はたいしたことはないと思って

いる学生もいれば、放射能汚染を恐れて海外に脱出したいと思っている学生もいます。海外から来ている留学生は、かなりの数が帰国したままです。また自分のことではなく日本の将来を憂えて、食欲をなくしている学生もいます。このような社会的な視野のもとでの優しさを持った若者は、今後もっと増えてくる可能性があるのではないのでしょうか。

浅野 NHKの「日本人の社会意識」調査の最新版によれば、いわゆる非科学的なものへの反転が特に20代の若者にみられるそうです。そのことが「原発のリスクをもっと重くみるべき」という方向に転換する契機になる可能性がある気がします。

いずれにせよショックは大きく、いろいろな問題をあぶり出しています。私の勤務先でもボランティアに行く学生が出ています。やはり「何かしないと」と感じている人は多いですね。

阪神・淡路大震災が起きた1995年は「ボランティア元年」と言われましたが、さらにボランティアを一般化させる動きになるのか。「実利志向のまじめさ」「知的好奇心型のまじめさ」のほか、「ボランティアタイプのまじめさ」も1つの軸として形成される契機になるのかどうか、注目されます。

また、原発だけでなく、被災地の悲惨な状況を見て、何とかしなければという気持ちが芽生えた学生も少なくないでしょう。確かに、身近な人間関係の充足が土台にあると思いますが、今回の震災で、見知らぬ他者にまで思いやりや想像力が及ぶようになる可能性があると感じました。ただそのきっかけが、こんな惨事だったことが、何とも残念です。

大学生と「多元的な自己」

浅野 1970年代終盤、栗原彬さんが「私的な優しさがどう公的なものに伸びていくか」とおっしゃっていました。

武内 非常に閉鎖的な村はかえって外から来た人を受け入れ、歓迎するということがあります。つ

まり身近な人間関係が親密であることは、外を排除することにはつながらない場合もあります。私的なものと公的なものの関係は複雑ですね。

浅野 ボランティアに参加したり、人に優しく生きたくても、就活を優先せざるをえない状況もあります。いろいろな志向や可能性があっても、それを押しとどめるように就活のウェイトが拡大している。そこにジレンマを感じる学生は少なくないはずです。できればゆったり優しく生きたいのに、実際には生活の糧を得るため過酷な環境に身を置かなければいけない。そこに矛盾を感じている学生は多いと思います。

他方で、大学生に限らず若者の人間関係を考えるとき、身近な人間関係志向とともに特徴的だと思うのが、多チャンネル化（状況志向）です。あの場ではこう、この場ではこうと、場に応じて自分の振る舞い方や意識をチューニングするような作法が、普通になっている気がします。それを駆使して、就活では就活モード、友人には友人モードと使い分ける学生も、相当数いそうですね。

先ほど触れた調査の結果をみると、多元性が高いほど自己啓発的になりやすいという傾向が読み取れます。直接結びつくかわかりませんが、「就活に対する道具的な態度」と多元的な自己は、相性がいいのではと思います。つまり自分を多元化し、切り替え使い分ける能力は、就活に必要な能力かもしれない。ある種の認知能力、自己コントロール能力として、共通している部分がある気がします。

武内 最初は就活を嫌がっていたり、何度も落とされて落ち込んだりしても、回数を重ねるうちにコツを覚え、楽しむようになる学生もいます。これが浅野先生のおっしゃった、多チャンネル化でしょうか。面接と授業が重なっても、うまく両立を図っています。そういったことも含めて考えると、就活を通じて学生が成長する部分もあると思います。

今の大学生に必要な教育とは

浅野 就活の長期化・早期化で大学の授業が成り立たず教員が困っていることに対し、「そんな立派な授業をしているのか」という反論の声もあります。ご指摘のとおり、立派でない授業もあるでしょう。しかし私は、その点以外にもポイントがあると考えています。就活の長期化・早期化により大学の授業が成り立たなくなることの本当の問題は、「大学生が授業をさぼる権利を侵害していること」ではないでしょうか。

極端な話、大学とは、「授業に出てもいいし、さぼって別のことをしてもいい」場だと思っています。その自由さにも重要な意味があるのであって、その自由な時間を、あまりにも就活に奪われるのはどうでしょうか。

教員としては、ゼミには休まず出席してほしい。しかしそれ以上に、大学時代の無駄な時間が削られることが問題ではないかと考えています。大学は、実際に役立つことだけで100%満たされることが望ましい空間ではありませんから。

武内 就活が大学生の「無駄な時間」を削ることが問題という指摘は、興味深いですね。それにしても一生懸命就活して入社しても、数年のうちにやめてしまう学生が少なくありません。あの就活のエネルギーは何だったのかと、不思議に思います。正社員になることだけが自己目的化していることの帰結なのでしょうか。

浅野 居神浩さんは、先ほど挙げた論文の中で、いわゆるブラック企業などに対して身を守る術を教えることが、学生に対して社会学者としてやるべき必要なことだとおっしゃっていました。そうした企業に行ってしまう学生まで考えると、大学生の就活の実状は多様であって、十把一絡げに「大学生の就活」と括ってしまっただけではいけないかもしれませんね。

武内 単に就職できればいいわけではなく、労働法や働く人の権利など、きちんと大学が教育すべきということですね。

浅野 キャリア教育は、そういった方向に向けて

いるのでしょうか。個人的な印象では、どう就活するかという点ばかりにフォーカスしていて、就職後に自分の身をどう守るかについては手薄になっている気がします。

サークルが育む「グループ形成力」

浅野 今、大学のサークルは、どんな状況なのでしょう。大学生協連の調査によれば、サークル加入率は2000年代に入って少し復活したといえます。でもリーマンショック以降、また下がっているかもしれません。

サークル同様、就職した後に労働組合に入る若者が、すごく減っているそうです。大学のサークルと、就職後の労働組合は決して無関係ではないと私は思っています。「自分の身を守るために徒党を組む作法」を学習するのに、サークルは絶好の機会だといえるのではないのでしょうか。

武内 サークルでの集団体験が、就職後の労働組合活動に繋がるという考えは面白いですね。

浅野 集団を組んで行動や主張をするという経験がないと、頭で労働者の権利や団結権の知識があっても、実際には何もできなかつたりすると思います。集団を形成して自分たちの声を上げていく練習を、大学時代にしたほうが良いというのが私の考えです。

大学生活の中の、一見無駄に見える活動の中に、そういうものが伏流していると思います。しかし今、大学の中で実利的なものへの志向やコンプライアンス化が進むにつれ、無駄がどんどん排除されていて、無駄に見える活動の中の可能性が失われているように感じています。労働者としてひ弱な人を育てていては、大学としても望ましくないことのように思えるのですが。

武内 今は学生の作る新聞も、多くは発行前に大学がチェックを入れて修正の指示を出しています。すると学生は、それに従って素直に直すようですね。

浅野 ひょっとして、「大学のお墨付きを得た」と感じているのでしょうか。

私は、大学のサークルに対して、その手の社会関係資本的な機能を期待しています。サークルでなくとも、集団の力を結集する、組織の力で主張を通す訓練を、どこかで経験しておくべきではないのでしょうか。ひとりではできないことには限界がありますから、「個人化」の逆の流れをつくっておかないといけません。エリートなど個人で力を持っている人はいいと思いますが、そうでない普通の人は、集団の力に頼らないと生き残れない状況があります。そのことを考えると、そうした集団的な行動の訓練の機会や場、「グループ形成力を育む場」を、大学の中に確保することが必要ではないでしょうか。

武内 我々の頃は戦後民主主義の時代で、児童会や生徒会が大事にされ、学生自治が尊重されました。しかし今の大学生は、そういう体験をあまりしていません。

大学教育がもたらす考え方の多様性

武内 今日、大学に行くこと自体が価値があるかどうか考えてみたいと思います。大学進学者（あるいはその家計）は、高額の授業料と放棄所得を合わせかなりの額を、大学教育に投資していることになります。

大学では、いろいろな考え方が許容されます。大学では授業も選択ですし、いろいろな考え方、自分とは違う考え方も許容する態度は学ばれていると思います。授業においても、「こういう見方もあるが、別の見方もあるので、自分で考えなさい」というものが多いでしょう。1つの「正解」があると考えるのではなく、複数の見方の存在を前提とするのが大学の授業です。ですから大学教育を受けること自体が、思考の柔軟性を養っていると思います。大学教育は無駄なようで実は大きな意味があると思います。

浅野 私は若者全体を対象に研究する機会が多いのですが、今回の調査では大学生を対象に論じました。若者論の観点から大学生論をやるのは非常に難しいですね。

吉川徹さん（大阪大学）は、さまざまなことが高卒か大卒かで分断されつつあるとおっしゃっていました（吉川 2009）。彼の立場からすれば、大学生（あるいは大卒グループ）は意識の上でも文化の上でも明確に違った集団になるのでしょうか。この場合、若者論というよりは、階層論という方がふさわしいものとなりそうです。

相対化ということであれば、私は1年生に対して、よくこんな話をします。「高校までの勉強では、正解と合っていることが一番よい。しかし大学の勉強では、正解と合っていることは、既に言われていることなのでダメ。正解がある勉強は、大学ではあまり役立たないと思ってください」と。しかし資格志向とは、ここで言う高校的な勉強なんですよ。

武内 自分の考え方をもちつつも、違う立場の人の見方も含めて柔軟に考える。大学では、いろいろな見方を許容することが学べるのではないでしょうか。

大学時代にすべきこと、大人がすべきこと

武内 これまでのことから、学生が大学時代にすべきこと、我々大人がすべきことは、いろいろ考えられます。後者であれば、先行世代の大人が、若者によきモデルを示すべきだと思います。今大人はみんな利権に走り、いいモデルを示す人は少ないですね。

前者に関しては、大学に入れば急に何かができるようになるというわけではないことにも注意しておきたいと思います。飛行機の滑走と同じで、どんなことも、小さい頃から高校時代までにある程度やっておかないと、大学で急にやるというのは難しいと思います。大学に入って急に飛べるわけではありません。

浅野 難しいですね。先日、あるシンポジウムに出席しました。そこに出席したカナダのある心理学者が、大学生のソフトスキルについてのかなり詳細なパネル調査の結果を報告していました。それによると、大学の4年間でソフトスキルの多

寡の差はなかなか埋まらないとのことでした。その場にいたキャリア教育関係の専門家たちはみんなため息をついていました。

実際、本田由紀さんの調査でも、コミュニケーションスキル育成の基本は、家庭だとされています。考えれば考えるほど、大学ができることは限られてきます。スキルが既にかなり決められた人たちを受け入れ、それが壊れない程度に送り出す。それくらいしかできないのかなど、悲観的に思うこともあります。

先ほど触れた職業的レリバンスですが、これを高めるのには、いい面もあると思います。しかし他方で行き過ぎると、自由で無駄なものが削られ過ぎると思うので、ちょっと両義的なところがあります。そうならないやり方なら職業的レリバンスもいいかと。

実際私たちも「職業入門」という授業をやっています。2年生に向けたキャリア教育なのですが、我々が教えられることは、就職後に予想される現実について、例えば3年以内離職率とか、退職理由は何が多いかとか、そういったことだと思っています。筒井美紀さん（法政大学）が「事実漬け」つまり「過酷な事実を徹底的にデータで示していくことが大切」とおっしゃっていて、なかなかそのレベルにまでは達しませんが、狙いとしては近いかもしれません（筒井 2010）。もっとも、提示する事実が過酷すぎてもモチベーションを下げってしまうところがあるので、そこは注意が必要かもしれません。

しかし改めて、「集団の力をつくり出す練習」こそが、大学に求められていると思いました。そのために大学は、うるさく言わず勝手にやらせる場を、もっと提供すべきだと思います。

やはり大学生に「集団の力をつくり出す練習」はさせないと。社会に出てひとりで立ち向かうのは絶対に無理なので。人生に必要な力を身につけるためのコストだと割り切り、リスクをある程度引き受けるべきでしょう。また教員自身の可能な範囲で、そういう場所を保障していくことが必要では。それは、自主ゼミの形でも、実験的



な授業でもいい。そういう空間を一人一人が確保していくことが、ささやかながら我々にできることだと思います。

※この対談は、2011年4月15日に行われたものです。

文献

- 居神浩，2010，「ノンエリート大学生に伝えるべきこと——「マージナル大学」の社会的意義」『日本労働研究雑誌』52（9）：27-38。
- 北村文・阿部真大，2007，『合コンの社会学』光文社。
- 吉川徹，2009，『学歴分断社会』筑摩書房。
- 千石保，2001，『新エゴイズムの若者たち』PHP研究所。
- 武内清・岩田弘三編，2011，『子ども・若者の文化と教育』放送大学教育振興会。

- 筒井美紀，2010，「『キャリア教育』で充分か？」本田由紀編『転換期の労働と〈能力〉』大月書店，183-193。
- Halsey, A. H., 2004, *A History of Sociology in Britain*, Oxford: Oxford University Press. (=2011, 潮木守一訳『イギリス社会学の勃興と凋落——科学と文学のはざままで』世織書房.)

たけうち・きよし 敬愛大学国際学部 特任教授、上智大学 名誉教授。主な著書に『キャンパスライフの今』（編著，玉川大学出版部，2003）。教育社会学専攻。

あさの・ともひこ 東京学芸大学教育学部 准教授。主な著書に『趣味縁からはじまる社会参加』（岩波書店，2011）。自己論・若者論専攻。